

# アカデミック・ジャパニーズとしての日本事情に関する 一考察

—2つの大学における実践から—

吹 原 豊

## 1. はじめに

筆者がフェリス女学院大学留学生センター（以下、フェリスとする）に着任したのは2006年度である。業務の中心は留学生対象の日本語教育であり、「留学生日本語Ⅰ、Ⅱ」という科目名の授業を週に7授業時間もしくは8授業時間（すべて1単位）担当している。また、それ以外に、「日本事情」という科目名の授業を前期か後期のいずれかに1授業時間（2単位）担当することになっている。

フェリスに着任する以前に筆者は主として海外の予備教育<sup>(注1)</sup>や中等教育段階の日本語教育に携わってきた。そこでは授業活動の折々に日本文化紹介の要素を取り入れたり、ビジターセッションや現地の日本企業が関係するイベントに参加したりする形での日本の紹介を試みるがあった。そして、当時は教科書や絵カード、写真パネル、ビデオに加え、筆者を含めた任国の日本人ネットワークそのものが日本理解への鍵という意味での日本事情教材であると漠然と捉えていた<sup>(注2)</sup>。

また、フェリスで日本事情を担当することになると同時に、非常勤講師としての出講先である東京都内の私立大学（以下、A大学とする）でも日本事情を担当することとなり、それまで国内外の日本語教育機関で取り組んできたものを再検討し、留学生の必修科目<sup>(注3)</sup>である、「アカデミック・ジャパニーズ<sup>(注4)</sup>」としての活動を行うことを目指すようになった。その際に念頭に置いたのは、異文化間コミュニケーションを媒介とした日本事情ということであった。そして、当初は日本人履修者の多いA大学において実践を行い、その後、環境が整うにしたがって徐々にフェリスにおいても実践を行うようになった。本稿では、A大学での実践を中心に、2つの大学における筆者の日本事情における教

育実践を通して、異文化間コミュニケーションを媒介としたアカデミック・ジャパニーズとしての日本事情の可能性を考察することにする。

## 2. 多岐にわたる日本事情の捉え方と新しい展開

本稿において、筆者の日本事情授業における実践について報告する前に、まず先行研究を踏まえて、これまでの日本事情がどのようなものであったのかについて見ていくことにする。

まず、『日本事情ハンドブック』(1995)の中で述べられている内容について簡単な紹介を試みる。

- ・日本事情は日本語教育をことばの教育という限られた面にとどめず、ことばによる文化の教育として捉えたところから成立したものである。それは、ことばと文化の教育が異文化理解の橋渡しとしての期待を負うものだからであり、日本語そのものの学習も日本の文化の理解を伴わなければ効果的には成立しないという側面を持っているからでもある。
- ・日本事情の扱う範疇・領域は極めて広い。日常生活一般をはじめとして、あらゆる学問分野に関わる学際的な領域であるともいえ、何を対象として扱うべきかについての共通理解を求めるのは困難である。
- ・日本事情に関しては、上記に関連して「なにを」「どのように」「だれが」教えるのかというコンセンサスが得られにくく、その専門性との関係でも議論がしにくい状況が続いている。
- ・授業の実態を見ても、教え手の得意とする内容が中心となっている。経済や歴史など、それぞれの分野の専門家が固有の分野について分かりやすく解説する授業と日本語教師がさまざまなテキストや記事などを利用する日本の文化・社会入門としての授業に大別できる。
- ・日本事情の範疇・領域を漠然とさせている遠因として、昭和30年代<sup>(注5)</sup>に留学生受け入れの体制が作られはじめた動きの中で、(留学生にとって必要な能力について、専門に関するもの以外で)日本語能力のほかに、日本での生活に役立つものを与えるという趣旨で設定された学科目であること。その目的や教育内容について明記されたものはなく、大学や担当教員に内容の選択を

任された形になっていることが挙げられる。

以上の内容と関連して、一二三（2006）は自らの、ビデオを使った日本事情授業の実践報告の中で、1980年代までの日本事情の特徴を以下のようにまとめている。

- ① 目的：外国人が日本社会に適応して生活できるようにするため（同化させるため）。
- ② 扱う内容：日本社会に関する知識、伝統的な生活習慣など。静態的・均一的・一般的に捉えられた日本文化・日本人に関する知識。  
例) 日本人＝まじめ・勤勉・義理人情…  
日本の会社＝終身雇用・年功序列・タテ社会…  
日本食＝すし・てんぷら・納豆…  
日本の慣習＝「つまらないものですが…」[何もありませんがどうぞ]、曖昧・婉曲な表現…  
日本の伝統芸能＝〇〇道、歌舞伎、相撲  
日本の慣習＝初詣、花見、中元・歳暮
- ③ 教え方：教師が留学生に知識を与える・理解させる（押し付ける）。

さらに、一二三は1980年代までの日本事情は留学生に日本人・日本社会のステレオタイプを植え付けるものであるという反省に立って、それ以降には「『日本事情』を『なぜ』教えるのかという目的、『何を』教えるのかという扱う内容、そしてそれを『どのように』教えるのかという、教え方の見直しが迫られてきた」と捉えている。そして、見直し後の日本事情の特徴を以下のようにまとめている。

- ① 目的：留学生自身が能動的に日本人や日本文化に触れることを通して抱いた疑問や関心を基に、自分自身の問題意識を持ち、日本人との直接のコミュニケーションや日本文化の直接体験によってその問題を掘り下げて考えつつ、相手の立場に立った考え方と自分がそれまでに無意識に持っていた自己の視点を認識し直し、新たな視点に立った思考の仕方を身に付けるこ

と、そうすることで国際的視野に立った相互理解・相互共存の態度や能力を培おうとすること。

- ② 扱う内容：日本人が見たステレオタイプの「日本」や平板な「日本文化・社会入門概説」ではなく、外国人の位置から見える「日本」であり、能動的・多様・個別的に捉えられた「日本」であり、また留学生の日常生活に即した個別の現象や留学生自身の「なぜ」に基づいた内容。
- ③ 教え方：「日本事情」が単に本や映像などのような一方通行的・表面的な体験ではなく、日本人との直接の相互交流を通して行われること、そしてここでは留学生側だけが何かを学ぶのではなく、その相互交流を通して日本人側にも学習が起こることを重視している。

最後の教え方の部分に関しては、大学の留学生担当カウンセラーの高松も自身の担当する「日本事情」の授業の中で、「留学生と日本の学生がお互いに知り合い、直接対話できるようにしてきた（高松2005）」と述べている。筆者も日本事情においては留学生と日本人学生の交流（相互作用）の重要性に着目し、その促進に努めている。

ところで、上記のほとんどすべてが異文化間コミュニケーションに関わるものであるが、ここで筆者が日本事情の授業実践において想定する異文化間コミュニケーションについて少し述べておきたい。

久米（2005）によると、異文化間コミュニケーションとは、「言語や思考、価値観など文化的背景の異なる人々の間で行われる多様なコミュニケーション現象のことである」という。われわれは一般に同一文化の中では文化とコミュニケーションの関係を意識しないものである<sup>(注6)</sup>。しかし、異なる文化の成員と出会うことで文化とコミュニケーションに関わる問題が表面化する。コミュニケーションの成立に不可欠なメッセージは、記号化される段階で、価値観や判断、思考や感情などの文化の影響を受けるため、誤解や困難が生じる可能性があるからである。グローバル化が進み、多文化の共生が求められる現代社会においては、社会を構成するすべての成員がこれまでより以上に異文化間コミュニケーションの力を持つことが求められている。そして、その養成を目指す教育実践は大学教育の場においても大きな意義を持つものであると考える。

筆者の日本語事情における授業実践においても以上を参考にしながら異文化

間コミュニケーションを媒介とした、アカデミック・ジャパニーズとしての日本語教育を目指している。

### 3. アカデミック・ジャパニーズとしての日本事情：A大学における実践例

筆者の非常勤講師としての出講先であるA大学において日本語・日本事情科目のカリキュラムを統括してきた堀井は初年次（日本語）教育について紹介した論考の中で、「日本の大学などでの勉学に対応できる日本語力（アカデミック・ジャパニーズ：以下、AJとする）」という視点から日本事情教育の活用を唱えている（堀井2006）。堀井はA大学における初年次（日本語）教育を「大学教育への橋渡しである『学び』につながる能動的な転換期教育であるという意味でのAJ」として捉え、日本のアカデミック・スタイルにあったスタディ・スキルと問題発見解決能力の育成を目指した自らの初年次（日本語）教育授業実践の試みを紹介している。A大学の日本事情に関しては、さらに深くAJ力をつけていけるよう他の日本語科目（口頭表現、文章表現、総合）と連携をとったカリキュラムが組まれている。それは日本人学生（主に2年生以上の日本語教員養成課程履修生）との共習であり、堀井の担当授業ではVTR等をリソースとしてグループディスカッションを行い、個人のまとめを提出するというタスク作業とグループ発表が行われる。グループ発表では発表後の仕切り力や質問力、コメント力のレベルアップに力が注がれており、コメントしあうことにより、クラスの発表レベルが向上していく。それは、よい発表に必要な条件であるテーマの絞込み、データの根拠の明示、論理的な展開に加え、プレゼン・スキルである時間配分、段取りなどに、各自が体験的に気づいて発表に取り入れていくからであるという。この日本事情では、留学生は分からない日本語や文化的なことがらがあったときに、日本人学生にすぐに聞け、日本人学生も（留学生の母国の情報を含んだ）「生」の留学生情報を知ることができる。言語上、異文化コミュニケーション上のメリットがあることも履修者の授業記述から認められるという。

A大学における筆者自身の実践も、コース全体の責任者である堀井の枠組みを基にして、その実践を参考にしながら筆者自身の関心の持ちようと、履修者の構成や関心の持ちようをすり合わせる感じで試行錯誤を続けているものであ

る<sup>(注7)</sup>。さらにいえば、フェリスでの日本事情の授業実践にも、特に日本人学生の履修が認められるようになった2008年度以降はA大学における授業実践の経験がフェリスでの諸条件に合うようにしながら生かされている。

## 4. A大学における筆者の実践

### 4.1 目的

A大学における日本事情は、前期開講の日本事情1と後期開講の日本事情2とに分けられる。それぞれの講義題目は日本事情1が「日本における異文化接触」、日本事情2が「日本で生活する外国人」である。筆者は前述の堀井の枠組みを前後期トータルで達成できることを目指し、前後期共通の目的として、シラバスに以下のように明記した。

「日本についての様々なことを知りながら、『文化』『言語』『コミュニケーション』についての理解を深める。留学生は日本語の総合力のレベルアップも併せて目標とする。」

その上で、授業の進め方として、日本事情1では、「多文化化が進む日本における『異文化接触』を主なテーマにして授業を進める。留学生と日本人学生のインターアクションを通して、自他の文化を相対化する視座を身につけ、多元的視野を獲得していく。」ことを謳った。一方、日本事情2では、「受講生はまずトピックに関連した討論を行い、文献や資料を読み込むことによって自身の関心領域と問題意識を明確にする。その後にアンケートやインタビューによる調査を行い、さらに討論を重ね、結果を発表することによって成果を示すこととする。」というように、より問題発見解決能力の養成に重きを置いた活動を指向している。

### 4.2 対象

筆者がA大学で担当する「日本事情1（前期）」、「日本事情2（後期）」の履修者。内訳は「日本事情1」は留学生9人（中国6人、韓国3人）、日本人11人。「日本事情2」は留学生18人（中国9人、韓国9人）、日本人15人。留学生の日本語レベルは中級～上級である。

### 4.3 実施時期および概要

#### 「日本事情1」2010年4月～8月（前期全15回）

- 第1回 自己紹介、シラバスの配布と授業内容の紹介、自己紹介メモの記入
- 第2回 「留学生について考える」 問題提起・討論
- 第3回 「異文化接触について考える」、ビデオ視聴・討論 小レポート
- 第4回 「ステレオタイプについて考える」 問題提起・討論
- 第5回 「カルチャーショックについて考える」 問題提起・討論
- 第6回 「異文化接触における18の問題領域」 問題提起・討論
- 第7回 「異文化適応・適応力チェック」 問題提起・討論
- 第8回 「カルチャーアシミュレータ」作成① カルチャーアシミュレータの紹介+グループ分け
- 第9回 「カルチャーアシミュレータ」作成②グループ&個人作業
- 第10回 「カルチャーアシミュレータ」作成③グループ&個人作業
- 第11～14回 作成したカルチャーアシミュレータについて 発表と質疑応答
- 第15回 ふりかえりと小テスト

#### 「日本事情2」2010年9月～2011年1月（後期全15回）

- 第1回 オリエンテーション：自己紹介、シラバスの配布および授業内容の紹介、授業の狙いと評価法、メモ記入（授業にイメージしてきたこと等）。テーマについての問題提起。
- 第2回 「外国人とは？」在留資格について グループ決定
- 第3回 移民とエスニック・コミュニティ1（日本）
- 第4回 移民とエスニック・コミュニティ2（韓国）
- 第5回 外国人研修生・技能実習生
- 第6回 外国人看護師・介護福祉士：移住労働の女性化
- 第7回 海外につながりを持つ子どもたち 発表テーマ決定
- 第8回 異文化受容と教育の多様化（夜間定時制高校をテーマに）
- 第9回 調査テーマについての討論・選定、調査の準備  
\*このあと各自で調査
- 第10回 発表準備：調査結果の整理・集計、分析
- 第11～14回 発表および討論

## 第15回 ふりかえりと小テスト

### 4.4 実施内容

前述の、授業の目的、および進め方にしたがって授業活動を行う。まず、日本事情1を例に取ってみる。授業初回から第7回までは、筆者がその日の討論のテーマに関して問題提起を行い、それについて各グループ<sup>(注8)</sup>で討論を行う。その後、討論の結果をまとめて発表し、さらにそれについて質問をしたり、コメントをするなどして全体化を図った。教師によるコメントも必要に応じてなされる。

第8回からはそれまでの授業で培った問題意識および知識を活用し、グループの会員同士が協力し合って「カルチャーアシミュレータ（以下、CAとする）」を作成した<sup>(注9)</sup>。CAのアイデア出しについてはグループ内で話し合いながら行うが、CA自体は一人につきひとつ作成する。次に、作成したCAを基に、1回の授業につき、1グループが発表を担当する。通常は各グループで司会進行役を決め、それにしたがって一人一人がプレゼンテーションを行い、その内容について討論を行う。また、その傍ら、作成されたCAやプレゼンテーション自体についてのコメントをクラスの全員がコメントシートに記入する。

最終回（第15回）は授業時間の一部を使って、これまでの授業活動で取り組んだことについて簡単に振り返りを行った後に小テストを実施する。

小テストは、主に授業初回から第7回までに扱ったさまざまなテーマに関する知識を問う問題と自分自身のプレゼンテーションに対して寄せられたクラスメートのコメントシートを元にして、授業活動を通しての自らの学びについて記述するものである。

参考までに記すと、CAで扱ったテーマはワリカンの習慣、料理の食べ方、あいさつ（おじぎ）、時間感覚、交通事情などに関するものであった。

次に、日本事情2である。授業の基本的な構成は日本事情1に倣っている。授業初回から第8回までは日本事情1での授業初回から第7回までに対応する。筆者がその日の討論のテーマに関して問題提起を行い、それについて各グループで討論を行う形式である。ここまでが学生一人一人の問題発見のための助走期間であるともいえる。第9回以降は発見したテーマについて文献資料にあたり、さらにインタビューやアンケートなどの調査も行う。「本を見れば分かることは



発表するまでもない」と呼びかけながら、自分自身の問題意識に沿って調査を行い、結果を分析し、考察を加えることによって問題解決能力を養うためである。日本事情1と同様に、最終成果の報告であるプレゼンテーションそのものは個人個人が担当するが、グループ全体としての(大)テーマを決め、その中での各自の関心に従った形での個人(小)テーマ設定になる。それまでの8回のグループ内討論に加えて、グループ全体としてのテーマを設定することはプレゼンテーションに向けた準備を共同で行う際にも有効に働くようである。

その次に、調査結果に基づいて、1回の授業につき、1グループが発表を担当する。通常は各グループで司会進行役を決め、それにしたがって一人一人がプレゼンテーションを行い、その内容について討論を行う。また、その傍ら、調査内容・結果やプレゼンテーション自体についてのコメントをクラスの全員がコメントシートに記入する。

最終回(第15回)はこれも日本事情1と同様に授業時間の一部を使って、これまでの授業活動で取り組んだことについて簡単に振り返りを行った後に小テストを実施する。

こちらも参考までに学生が選んだテーマについて紹介したい。あるグループは「在日コリアン」を大テーマにして、それぞれの学生が教育問題、帰化、アイデンティティ、在日特権と差別、さらに大局的な見地から外国人との共生を(小)テーマにプレゼンテーションを行った。そのほかの大テーマとしては「国際恋愛・結婚」、「バイリンガル」、「日本への留学」などがあった。

## 4.5 学生の学び

### 4.5.1 日本事情1

前述のように、日本事情1, 2共に授業活動の後半はプレゼンテーションを実施する。プレゼンテーションに際して、留学生の日本語についてはグループ内の日本人学生が必ずネイティブチェックを含むサポートを行うこととしている。プレゼンテーションを行う者に対しては、クラスメート全員からコメントが文書で寄せられることになっている。そのコメントを読んで、それに対する自分の考えと、日本事情の授業活動で学んだことを学生に自由記述してもらった。ここでは記述の中で前述の授業活動の目的および授業の進め方で挙げた項目に関するものを中心に紹介したい<sup>(注10)</sup>。

(1) 日本（もしくは自文化）についての理解に関するもの：

- ・CAを作成する上で自国の文化への気づきも多かった。普段何気なく暮らしていたが、いざ（留学生に）指摘されると「何でだろう」と疑問に思え、そういった点でもCA作成がいろいろ考える場になった。
- ・他の国の人々にとっては、日本のこのような部分がカルチャーショックになるのではないかと少し予想する力がついたと思う。
- ・CAを作ることであらためて「日本人」というものを見た。普段は周りに日本人しかいないので気にならないが、そこに一人でも他国の人が入ることで、日本の良さ悪さが見えてくるということを感じた。
- ・日本ではあたりまえと思っていたことが、他国では違うということを知ることができ、異文化理解の大変さと大切さを学んだ。
- ・異文化と比較することで自国の特性など、自分の国の文化についてもあらためて考えることができ、新しい発見や理解が深まった。
- ・日本事情で日本の良い部分と悪い部分が理解できる。日本人の人間関係もよく理解できる。これからの生活に役立っている（留）。
- ・日常の中での小さなことでも文化の違いが分かることに気づいた。（留）

(2) 自他の文化の相対化および多元的視野の獲得に関するもの：

- ・文化は人から切り離せない。その文化を否定することはその人自身を否定してしまうことだと思う。日本と違うからといってすべてを否定してしまうのではなく、まずは違う文化なのだとして理解する。それから物事を考えていかなければならないと思った。
- ・その国の特徴というのはあるにせよ、国民全員がそうとは限らないということも大切なことである。国ではなくその人自身と接しているという意識も異文化交流をしていく中で大切なのではないかとCAを作成して思った。
- ・ステレオタイプに縛られ狭い視野のままでは日本の外にある「面白い考え」などの情報が入ってこないもったいない状態になる。
- ・みんなの発表を聞いたとき各国へのステレオタイプが客観的事実に基づいているとは限らない、固定したイメージだと思った。しかし、(CAは) 実はステレオタイプを描くことではないと思う。（留）
- ・文化の違いについては「正しいか」、「正しくないか」ではなく、「何が違うか」「何故違うか」を考えるものだということが分かった。（留）

- ・(弁当に関して) 日本人も温かいものを食べたいがお昼の時間が中国、韓国より短く、温める場所もないから冷めたものをそのまま食べることが分かった。最近では、冷たくてもおいしいメニューがいっぱい出てくる。(同じ日本でも) 沖縄の人が中国と同じように温かい弁当を食べるのをはじめて知った。(留)
- (3) 日本語の総合力のレベルアップ (学生同士の交流に関するものも含む) および総合的な学びに関するもの：
  - ・発表を通じて、他のグループの留学生とも交流できたことも大きな成果といえる。
  - ・初めて留学生との共同作業で多少とまどった面があった。平然と締め切りを過ぎたり、頼んだことと違うことをしてきて大変だった。ただ、「中国人だから…」と思って果たしていいのだろうかと思ひなおして見てみると、私自身の連絡ミスであったり中国側の提案の方がよかったりと自分の内面に無意識のうちに出来上がっていた中国人のステレオタイプ像に気づいた。
  - ・グループでの作業でみんなで意見を出し合っただけの作業はよりグループの仲が深まってよかった。
  - ・異文化を持つ者同士の交流が緊張を過ぎれば楽しいものになるということが学べた。
  - ・CAを作成するため、グループメンバーの皆は一緒に相談して、考えて協力することは一番肝心なことだと感じました。(留)
  - ・留学生としての発想・体験を言って、皆は適当な内容を選んで文章を作る過程が一番重要だと思います。この中から知識だけでなくたくさんのことを学びました。自分で書いた文章の文法問題などを見直してくれた、レジュメを作るときも皆一緒にやってとても良いと思います。(留)
  - ・留学生の私はすごく勉強になった。日本語の作文や日本語が上手な皆の前で発表するなどは私にとっていい経験になったからである。(留)

#### 4.5.2 日本事情2

日本事情2についてもクラスメートからのコメントに対する自分の考えと授業活動全体を通して自分自身が学んだことを学生に自由記述してもらった。記述の中で前述の授業活動の目的および授業の進め方で挙げた項目に関するものを中心に紹介したい。

(1) 日本（もしくは自文化）についての理解に関するもの：

- ・外国人や留学生が抱えている問題点を知り、より日本人の配慮が必要になっている現状を知りました。
- ・この授業で話し合いなどを行うと、やはり「私の国では～」という話になりますが、自分の国のことも理解していないと「そうなんだ」で終わってしまいますが、理解していれば、なぜ違うか、なぜ同じかが分かるということも学びました。
- ・日本語のニーズが本当に多様になっているということも分かったし、日本がどんどん多文化社会になっているということも感じた。
- ・外国人労働者についての見方が変わりました。労働の困難さを学びました。
- ・正直なところあまり日本で働いている外国人の方についてほとんど知識がなく、授業でやったことがほとんど新鮮なものでした。
- ・以前に比べ、外国人を受け入れる体制は良くなってきたとはいえ、世界に比べ日本はまだ改善していかなければならないんだということについて学ぶことができた。
- ・留学生という立場で（日本で生活する）外国人のことを見てから、以前韓国ではぜんぜん理解できなかったことをわかるようになってそんなところが一番よかったです。（留）
- ・ひとつの大事なことに気づきました。ことわざの中で井戸のかわず大海を知らずということわざのように日本人なのに日本のことや日本人のことに気づいていなかった人がいたことです。私も母国の文化やイメージなど深く考えたこともなく、普通に生活してきたので留学生活を通して母国のことをいくつか教えてもらいました。（留）
- ・外国人に対するたくさんの制度とそれにしたがって出てきた問題についていい勉強になりました。（留）
- ・先生自身の経験や調査によって、なんか「日本」っていう国に昔より了解したと思う。（留）

(2) 自他の文化の相対化および多角的視野の獲得に関するもの：

- ・外国人とはいうけれど、そんなことは関係ない、同じ人間なんだと強く感じた。
- ・日本事情1から引き続き授業を取っているのですが、国という枠組みでもの

ごとを考えてはいけないということが1からも2でも感じました。

- ・人はそれぞれ違う環境で育ち、同じような人はいないと思います。国籍や見た目で人はなぜ差別をするのだろうかと深く考えさせられた時間となりました。しかし、皆の考えを変えることより自分が変わって皆と接することが大事なのではないかと考えました。
- ・お互いの国の中で違う文化というテーマにして、みんなで討論することはとてもよかったと思います。自分の国の話ばかりじゃなくていろいろな国の文化を身につけるととてもいい体験だと思います。(留)
- ・「日本に住んでいる外国人」について勉強して、私も日本という外国では外国人だと感じた。そして、外国人として外国に住むのは思ったより制約があるんだと思った。(留)
- ・日本文化や政治にはいい面もあれば悪い点もあります。要するに将来何かのものを分析する時によい点と悪い点を両立して分析するのは大切です。(留)
- ・学生さんたちは日本人・中国人・韓国人ですのもっと広い視野が広がるようになりました。(留)
- ・他の授業と違って日本事情は自分の意見だけではなく、他の人の意見も聞いたので非常に役に立ちました。他のグループの発表がアドバイスになって今までの時間を振り返ることができました。(留)
- ・日本にも韓国と同じに外国人のいろいろな問題があるんだなと思いました。わが国ではなく、日本を通してみるから外国人の問題がちょっと公平に見えて、そういうところがよかったと思いました。(留)

(3) 日本語の総合力のレベルアップ(学生同士の交流に関するものも含む)および総合的な学びに関するもの:

- ・この授業で学んだことは外国人との友情、このことだと思います。(中略)授業、授業外の交流を通して一人一人個人で見ると日本人にはないいいところがたくさん見えてき、そのことが根底になって、授業内でのグループの話し合いがより一層意義あるものになりました。
- ・自分が相手のことを理解しようと努めることによって、その人からも自分の意見を聞いてもらえるということを実感した。
- ・自分が行動することで留学生の手助けになれるんだと、グループ発表で学べた。

- ・今回初めて留学生が大勢いる授業を取りました。普段友達として留学生と交友を持ち仲良くしているが、授業となると、日本について思っていることや自分の国と日本の違いなどが改めて聞くことができ、いつもと違った一面が見れたりしたのがよかったです。
- ・あまり話したことのない留学生と一緒に授業を受けるだけでなくディベート（実際にはディスカッション）を通して授業が進んでいった。最初はこうしたら良いか分からなかったがとにかく話すことの重要性をとでも感じた。
- ・今までになかった形式の授業で、自分の意見をしっかり持つことだけでなくそれを相手に伝えること、そして相手の意見をしっかりと聞いてそれをまとめていくことの難しさ・大切さを学んだ。
- ・もちろん知識もそうであるが、実際の生活に転がっている、知りたかった小さな疑問やこれから生きていく上で大切なコミュニケーションの方を学べたことの方が大きいと思っている。すごく大切なこと。それから留学生の知り合いも得ることができた。
- ・相手を知るには、相手の分かる範囲内のものを使って、こちらから歩みよらなければ信頼を得ないことも学べた。（中略）とても異文化交流のためになる授業だった。
- ・グループで共通のテーマを持って、そこから自分がやりたいことを見つけていくというのは、自分1人でやっているようで、どこかで他のメンバーとつながっていくので「共有」するということができただけではないかと感じます。
- ・この授業活動を通して、日本人、中国人学生たちと話すことのために私の日本語の質力も良くなって本当に良かった。（留）
- ・（授業では）自分の意見をちゃんと表し、他人の意見をちゃんと聞き、日本語の練習にもなれます。（留）
- ・発表の準備をする時は日本の人たちのチームで準備をしながら日本のグループ発表も経験できてよかったです。（留）
- ・この授業から最も勉強になったのは、チームと一緒にひとつのことをやるという大切さだと思います。本当に自分が一人で生きていくではなく、かならず誰かに助けられながら生きていくということに気づきました。（留）
- ・発表がグループのメンバーと一緒にやったので集団意識が高まった。（留）
- ・チームワークを通して、チームから力をくれたことがもっとわかってきた。

自分ひとりの力で本当になにもならない、みんなの力で何でもできることがわかりました。(中略) 面白い授業ではなく、学生たちに成長させる授業をしたことに感謝したいです。(留)

- ・一番重要なのは自分で知りたいものを調べ、上手にまとめて皆に紹介することです。そして、その中にグループワークは大切だと感じました。(留)
- ・在日外国人の問題について色々な国の人々が集まって話し合えたこともよかった。(留)
- ・何よりもうれしかったのは自分のグループの人と仲良くなったということと、他の留学生たちと知り合いになったということ。自分が留学生なので、日本についてよく分からない部分があったら日本人の周りの人が面倒を見てくれたのも気持ちよかった。(留)

#### 4.6 考察

あらためて、前述の授業の目的に照らして、日本事情の授業実践について考察していく。

日本（自国）についての理解であるが、概して、日本人学生の側に多くの気づきと学びがあったようである。これは文化間移動を経て日本に滞在している留学生の場合、滞在の最初期から現在までの間に自他の文化の相違について考える機会に恵まれていることが想像できることから納得できる。ただし、考える機会の多さだけでなくその深さに着目した場合、日本人学生との相互作用によってより深い学びに到達している可能性も窺われる。

自他の文化の相対化および多元的視野の獲得に関しても、日本（自国）についての理解と同様な傾向がみられるが、同じ日本でも沖縄出身の学生から沖縄の例が紹介されたことによって、留学生の側も日本の中での多様性に目を向けるきっかけが提供されたようである。

最後に日本語の総合力のレベルアップであるが、日本事情の授業では教師による問題提起（口頭および文章）、グループ内での討論（口頭およびメモ書きなどの作文）およびその内容のまとめと全体化（スピーチ的な口頭表現）という毎回の言語活動に加え、発表の準備のためにCA作成や調査を行う必要がある。さらに、プレゼンテーションを行い、質疑応答を行い、コメントを読解し、その内容に文書で応じる活動が続く。「聞く」「読む」「話す」「書く」4技能のさま

さまざまなバリエーションを駆使しながらの言語活動になっており、かつ活動に対するフィードバックがすぐに行われるという特長もある。

日本人学生は日本語教員養成課程履修者であるため、留学生との直接的な相互作用の中で留学生の日本語理解や日本語使用に関わることによる利点は非常に大きい。前述の学生からの反応では紹介されていないが、日本人学生から、留学生の日本語サポートを行うことによって日本語教育に対する関心が高まった、留学生の高度な日本語運用に驚いた、留学生の日本語使用についてイメージがつかめたなどの声が聞かれたことを付け加えておきたい。

## 5. フェリスでの実践を踏まえての今後の課題

### 5.1 フェリスにおける実践

筆者は前述のように、A大学での実践を踏まえて、本務先であるフェリスにおける日本事情の実践を行っている。しかし、フェリスの場合は日本人学生の履修について比較的強い制限が設けられているため、実際の日本人学生の参加はごく限られてしまっている。また、A大学の場合と異なり、日本事情A（前期開講）、日本事情B（後期開講）の担当者が異なるため、通年での履修を意識した授業計画は立てられない。実際には日本事情を必修科目として履修しなければならない私費留学生の1年次生と交換留学生の一部だけでクラスが構成される可能性も考慮するとCAの作成を中心とするものより、現代日本社会に目を向け、留学生の疑問や気づき（問題発見）に自らの調査によって答える（解決）活動の方が適当であると考えた。そこで、A大学での日本事情2において行っているものに日本事情1の中で含めておいた方がいいと思われる部分を加えて授業活動を組み立てることにした。

以下に過去3年間の履修者と授業内容の概略を示す。

実施時期：2008～2010年度前期（4月～8月、全15回授業）

対象：フェリスで筆者が担当する「日本事情A」の履修者。

2008年度9人（日本人1人）、2009年度16人（日本人3人）、2010年度10人（日本人1人）

\*日本人学生には履修登録を行っておらず、聴講扱いの者も含む



## 日本事情A

- 第1回 オリエンテーション：自己紹介、シラバスの配布および授業内容の紹介、授業の狙いと評価法、メモ記入（授業にイメージしてきたこと等）。テーマについての問題提起。
- 第2回 宗教と異文化：映像の視聴と討論
- 第3回 留学生について考える
- 第4回 外国人労働者（1）：映像の視聴と討論
- 第5回 外国人労働者（2）：映像の視聴と討論
- 第6回 異文化受容と教育の多様化（1）：ゲストスピーカー招聘
- 第7回 異文化受容と教育の多様化（2）：資料の購読と討論 発表テーマ決定
- 第8回 調査テーマについての再考、調査の準備 \*この後調査の実施
- 第9回 調査結果の整理・集計、分析
- 第10回 発表の準備
- 第11回～13回 発表および討論
- 第14回 まとめ（発表内容や作成資料の日本語使用についてのフィードバック）
- 第15回 試験 \*レポートに代える場合あり

フェリスでは全体の履修者数が少なく日本人履修者もごく少ないため、A大学と比べてグループワークの量をやや減らし、留学生それぞれの問題意識を、クラス全体での討論を経てそれぞれが発表、レポートという成果物にする活動になっている。また、本務校である利点を活用して異文化受容と教育の多様化をテーマにした授業活動時には日本の定時制高校の置かれている状況とその可能性についてゲストスピーカー<sup>(注11)</sup>を招いての討論を行っている。

授業に対する学生からのフィードバックとしては現代日本社会に関して今まで気づかなかったことに気づき、見えなかったものが見えてきたという声が多く聞かれた。しかし、日本人学生との交流の側面が弱いことに対する物足りなさを口にする学生がいたことも同時に付け加えておかなければならない。

## 5.2 今後の課題

本稿では筆者の日本事情の授業について主にA大学での実践を中心にし、フ

フェリスでの実践報告も若干加える形で紹介してきた。先行研究から様々な教育機関における教育実践を踏まえての自らの試行錯誤を紹介することにより、異文化間コミュニケーションを媒介としたアカデミック・ジャパニーズとしての日本事情の可能性をある程度は示し得たと考える。

フェリスの留学生の中に、筆者の日本事情の目的を十分に理解したうえで、「日本人学生にこそ日本事情教育が必要なのではないか」との根源的な問いかけを行う者がいた。A大学では日本人学生から同様の声が聞かれたことがあるが、それが実際に日本事情を受講した日本人学生から出た声であることに意義がある。フェリスでの実践に関しては、そのことによって授業目的が実際に達成されていないとすれば大きな問題である。日本事情に関しては大学内でも様々な見解があり、フェリスでも日本人学生への開放をためらう声の一部には聞かれる<sup>(注12)</sup>。しかしながら、実際には日本事情は留学生、日本人学生双方にとって、お互いの相互作用が介在することによって十二分に有意義なものになり得るものなのである。

今回はA大学での教育実践が中心でありフェリスでのそれについて多くを紹介できなかった。あくまでも日本事情の歴史的流れの中で、A大学のような日本事情についての捉え方と実践があった上でのフェリスにおける実践であったという経緯があるためそこに重きを置かざるを得なかったためでもある。フェリスでは筆者の担当授業以外にも3つの日本事情が開講されており、そのうちの一つは留学生担当教員による授業である。折に触れ意見交換は行っているが、その他の担当者による場合であっても、ある程度共通する枠組みを設けるべきかについても討論を重ねていきたいと考えている。

最後に、日本事情の実践に関する従来からの指摘でもあるが、本稿においても「文化」と「コミュニケーション」の関係について、十分な立ち位置を示しているとはいえない。今後の日本事情の発展のためにも、例えば、文化やコミュニケーションについての構成主義的可変的な捉え方を意識した日本事情の教育実践を行っていく必要性もあろう。あわせて今後の課題としたい。

## 注

注1 留学希望者が大学等の高等教育機関で支障なく教育を受けることができるようにするための教育。予備教育では、高等教育を受けるのに必要な日本語と、専攻に応じて日

- 本の大学等の一般教育科目程度の教科の教育が行われる（水谷ほか2005）。
- 注2 教科書自体が『日本社会再考』などの「日本事情」を題材にしたものを使っていたこともある。
- 注3 A大学では日本人学生が大半を占める日本語教員養成課程の受講者をもその対象に含む。フェリスでも2008年度からは日本語教員養成課程の受講者のうち3・4年次生に解放された。さらに、2011年度からは日本語教員養成課程の履修者であれば、1年次からでも履修可能になる予定である。
- 注4 門倉（2006）は、「アカデミック・ジャパニーズ（以下AJとする）とは、『大学での勉学に対応できる日本語力』をさしている。『大学での勉学』の根幹は、『学び方を学ぶ』ことにある。『学び方を学ぶ』ことは、初年次教育において最も有効だが、大学教育全体を通じての〈教養教育〉の中心的課題である。『学び方を学ぶ』（教養教育）では、『問題発見解決学習』において、学習者の既有的『市民的教養』としての知識を有機的に活用させるとともに、学習者の『自己を表現し、他者と出会う』というコミュニケーション力を育成することが肝要である。つまり、〈教養教育〉としてのAJは、上記の意味で、〈学びとコミュニケーション〉の日本語力をさしている。」としている。本稿におけるAJもこの定義および解釈に従うことにしたい。
- 注5 一三三（2006）によると、日本事情が大学留学生のための特例科目として認定されたのは1962年のことであるという。
- 注6 『異文化コミュニケーションワークブック』（2001）では、異文化（間）コミュニケーションを考える前に、まず「コミュニケーション」がどのように捉えられ、「文化」とどのように関わってくるのかについて共通の理解が必要であると述べている。まず、それぞれの定義としては「文化とは、ある集団のメンバーによって幾世代にも渡って獲得され蓄積された知識、経験、信念、価値観、態度、社会階層、宗教、役割、時間・空間関係、宇宙観、物質所有観といった諸相の集大成」であり、「コミュニケーションとは、私たち人間が自分自身の内部体験や外界からのさまざまな刺激に対して、自分なりの意味を見出そうとして努力する創造的なプロセス」であるという。この2つを結ぶものは行動の認知である。
- 注7 （本稿で述べる）以下の対象、実施時期および概要は2010年度のもの（最新のもの）を記す。
- 注8 この場合は全履修者20人を5人ずつ4グループに分け、毎回の討論からプレゼンテーションまでグループ内で助け合って行うこととした。グループ分けの際には留学生と日本人学生の数が偏らないよう留意した。
- 注9 異文化トレーニング手法の一つ。最初にある事例と何通りかの解釈が与えられる。その中から正しい解釈を選んでいくが、正しい解釈が選べなかったときは、その文化の背景になっている考え方や行動様式について考え直さなければならない。このようにして、ある文化についての理解を深めていく。比較的短時間で異文化についての理解を深めることができるので、異文化トレーニングの中では頻繁に行われている。選択肢はいくつかの文化を背景とした解釈が選ばれることが多い。その中から、ある文化の中で、その事例をどのように解釈すれば良いのが示されていく。CAの利点としては、①日頃体験できないような他文化の一面を擬似体験できる。②第2言語習得や異文化適応に応用できる。などが上げられ、他文化および自文化への気づきをもたらし、学習者に新たなカルチャーショックを引き起こすものとして適当な教材である（三角1997）。
- 注10 文章末に〈留〉とあるものは留学生のコメント。ないものは日本人学生のもの。
- 注11 ゲストスピーカーは元定時制高校教諭（現在中学校数学教師）で映像製作者。
- 注12 日本人学生に〈留学生向けの〉日本紹介を目的とした授業科目を開放することは内容が易しすぎることになるのではないかと誤解に基づく指摘がある。また、一部の大学で行われているように、日本事情科目は留学生に英語で提供されるものであり、日本人に開放する場合も英語で行った方がフェアであるという意見などもある。

## 参考・引用文献

- 石井敏・久米昭元 (2005)『異文化コミュニケーション研究法』有斐閣ブックス  
大橋敏子・近藤祐一・秦喜美恵・堀江学・横田雅弘 (1992)『外国人留学生とのコミュニケーション・ハンドブック』アルク  
門倉正美 (2006)「〈学びとコミュニケーション〉の日本語力 アカデミック・ジャパニーズからの発信」『アカデミック・ジャパニーズの挑戦』ひつじ書房  
佐々木瑞枝・門倉正美 (1991)『日本社会再考』北星堂書店  
高松里 (2005)『日本に住む外国人留学生 Q&A』解放出版社  
堀井恵子 (2004)「日本人大学生に必要な「日本語力」とは何か。それはどのように育てることができるのか。」『武蔵野大学文学部紀要第5号』19-25頁。  
堀井恵子 (2005)「日本人大学生はどのようにして異文化コミュニケーション力を身につけることができるのか—日本語教育実習を通して—」『武蔵野大学文学部紀要第6号』13-24頁。  
堀井恵子 (2006)「留学生初年次（日本語）教育をデザインする」『アカデミック・ジャパニーズの挑戦』ひつじ書房  
一二三朋子 (2006)「ビデオを使った『日本事情』授業の実践報告」『論究日本事情』31-48頁。  
水谷修・佐々木瑞枝・細川英雄・池田裕編 (1995)『日本事情ハンドブック』大修館書店  
三角友子 (1997)「日本語学習者に向けたビデオ・カルチャー・アシミレーター の作成」『神田外国語大学異文化コミュニケーション研究』第10号、75-95頁。  
八代京子・荒木晶子・樋口容視子・山本志都・コミサロフ喜美 (2001)『異文化コミュニケーション・ワークブック』三修社